



第8回通常総会特別講演

農村・農家の“豊かさ”と“貧しさ”

富山県立技術短期大学教授 足立原 貫

技術革新と経済成長を背景に農村農業のつくり変えが進められてきて十数年になろうとしています。昔の農村ではとても見ることはおろか、考えられもしなかったような大きな機械や施設が導入され、作物の栽培や家畜の飼養の仕方もういぶん変わりましたし、圃場の区画が大きくなったり、農道が整備されたりして農村風景もういぶん変わりました。農村といえばつきものだったような、カヤぶきの家や馬小屋や土堀などが姿を消し、ピカピカの新建材による家、自家用車のための車庫、ブロック塀などがそれらにとってかわっています。家の中に入ってみれば、カマドやイロリに代わって、ガスレンジや石油ストーブ、さらに電気洗濯機、電気冷蔵庫、カラーテレビ、クーラーなど、かずかずの電化製品や豪華な洋風の家具類などを備えて、農家の暮らしもすっかり“都会風化”し、農村・農家は昔の“貧しさ”を脱してたいへん“豊か”になったかのようです。

ところが、もう数年前のことになりました。うか、農村部を巡回しているという一人の保健婦さんから、次のような話をきかされました。

「立派な家がどんどん新築されて、私たちにとても手が出ないような高価な家具や大きなカラーテレビが買われているんです。自家用車を持っているのも、もう軒並にとってもよいほどですし、海外旅行もふくめたデラックスな観光旅行の話に花が咲くのも珍しいことではなくなっています。昔とはたいへんな変わりようです。けれども、私たちの職業意識から立ち入ってその生活内容を見てみると家族の健康状態や家計のやりくりの状態は、昔とちっとも変わっていないどころか、外見の消費生活水準の向上とのアンバランスからかえてみじめで、悪くなっているとさえいえます。現金収入欲しさに涙ぐましいほどの働きをする農家の主婦たちの姿を見ているとあわれで、決して生活水準の向上とか、豊か

になったとかいえるものではありません」そして、さらにこうつけ加えて、私に質問してきました。「生活の都市化による消費生活水準の向上というのは、ひところ何とかの一つおぼえみたいに騒がれたGNP上昇論と同様の、みせかけの豊かさを言っているのではないか、こういう“へんな豊かさ”の幻想を生むのは、何か心の病気にかかっているからではないか、どうも私にはそう思えてしかたがないのです。一体、“豊かさ”って何なのでしょうか」

その保健婦さんへの回答が今日の標題の話の骨子となっています。

◇ ◇ ◇

「生きていこう」という積極的な強い意志に根ざすものであれ、「死にたくない」という消極的な気持からのものであれ、いずれにしても、生きるための営みをつづけていく人々は誰も「自分はみじめに暮らそう」とか、「自分は貧しく生きよう」と思うものではないでしょう。「物質的」とか「精神的」とかのレッテルをわざわざ貼らないまでも、“豊かな人生”を思い描いて、それぞれ、生きるための営みをつづけていくものではありませんか。

ところで、この“豊か”ということを考えてみると、ただいま私自信も口にしましたように、「物質的豊かさ」と「精神的豊かさ」を対比させて“豊かさ”を使い分けるのが一般のようです。しかし、私は本来“豊かさ”というのは「精神的」なものであると思っています。モノが沢山あるということが、即「豊か」で、モノが欠乏しているということが、即「貧しい」につながるものではないと思います。もともと“豊かさ”というのは、モノやカネの多少だけを尺度に“ひとり歩き”できるものではないでしょう。“豊かさ”には常に“安心感”が裏打ちされているはずです。ゆったりとした安心感のともなわない豊かさなどはあり得ないではありませんか。多くのモノ

やカネを持っていることが、必ずしもゆったりとした暮らしの安心感を抱かせてくれるものではないはずです。たとえば、数億円のカネを握った者が、そのことをもって“豊か”であるとされるかどうか。そのカネを持ったために、いつ襲われるかわからないとびくびくしているのであれば、あるいはまた、そのカネではまだまだもの足りなく「もっと、もっと」と何かに追いたてられるようにあくせくしているのであれば、どうしてそこに豊かな人の姿を認めることができるのでしょうか。いくらモノやカネが沢山あっても、おそれや不安がつきまとう状態は、決して“豊か”などといえるものではないでしょう。先ほど述べた保健婦さんの話にもあったように、それこそ“みじめ”で“貧しい”といえる状態ではありませんか。

では、生きつづける営みの上での“安心”の保障を、人々は“何”によって得ているのでしょうか。その“何”は時代とともに移り変わってきています。言い換えれば、「暮らしの豊かさ」「豊かな人生」を求める人々の気持は時代を問わず同じであっても、“豊かさ”を得るために人々が求めるものは時代によって同じではありません。“それ”を持つことが豊かな暮らしにつながると思われる“それ”は時代とともに移り変わってきているのです。豊かさの裏打ちとなる“安心感”を得るために人々が求めた最初のもの、「血のつながり」であったと考えられます。たとえ稔りの秋に豊年満作でモノを沢山手にすることもできて、谷間の向うに素姓の知れない部族がいて、こちらを虎視たんたん狙っている、というような状況下では、決してゆったりとした安心感で豊かな稔りを祝うことなどできないでしょう。いつ襲われるかも知れないというその不安をなくす手っとり早い方法は、向うの部族と血縁関係を持つことではありませんか。「血のつながり」ができれば、何の恐れをも抱かずに、安心して、ともに、豊

かな稔りを祝い合えるのでしょう。次の時代の特徴となる“豊かさ”を表わす指標は「土地の広さ」であったといわれます。領有している土地の広さが、暮らしの豊かさを保障したのです。広い土地からはそれだけ多くの食物や資源を得ることができたからにはかなりません。そのような時代に豊かな暮らしを求める人々は、血を流してでも、より広い土地を領有しようとしたでしょう。

時代が移り変わり、社会の制度の上で「身分」というものが力をもってくると、その身分で土地を支配することができるようになります。そうなると、高い身分につくことが、豊かな暮らしの保障となり、人々は争って立身出世しようとしたでしょう。親は子に、エラクなることを期待し、エラクなった子によって“豊かさ”が得られると思うのです。さらに時代が移り変わり、土地にしろ、身分にしろ、みんなカネの力によってどうにでもなるという時代になりますと、すべての事柄がカネに換算して考えられ、「カネにならなけりゃしょうがない」「カネさえあれば」という風潮を生みます。この時代の風潮の中で、人々が血眼になって求めるものはカネ、現代流にカッコよく言い換えれば「所得」です。このように「所得の高さ」を豊かさの指標とし、「所得」こそが豊かな暮らしを保障してくれるものであるとして、まさに官民あげて“所得格差”を「問題」とし、“所得増大”を「目標」とするという「所得第一主義」の時代が現代です。この現代が問い直されています。所得第一主義によってもたらされた現代の豊かさが、おかしい、へんだ、と問い直されているのです。では、どうおかしいのでしょうか、どうへんなのでしょうか。

「血のつながり」を求めるにしる「土地の広さ」を求めるにしる、「身分の高さ」を求めるにしる、あるいは「所得の高さ」を求めるにしる、それが豊かさにつながり、それを得ることが豊かさの保障になることだとされた

のは、それによってモノの獲得欲が満たされるからという点では同じです。血のつながりのある間柄であれば、襲われる心配はまずなく、襲われなければ、自分が得たモノを失なうことはない。領有している土地が広ければ広いほど、その領内からそれだけ多く欲しいモノが手に入る。身分が高ければ高いほど、その権力によって、それだけ多く欲しいモノが手に入る。所得が高ければ高いほど、その財力によってそれだけ多く欲しいモノが手に入る。「豊かさの指標」「豊かさを保障するもの」が時代とともに移り変わっても、豊かさを追うための内容は同じだったわけです。

こうして現代に至り、昔にくらべて人々ははるかに多くのモノを手中にしているはずなのですが、この状況がおかしい、「豊かだ」といってもどうもへんだ、“へんな豊かさ”だと感じられるのは、この状況をつくりあげてきた“ものの見方・考え方”、「モノ欲しさ」一途に走りつづけてきたことがおかしかったからではないでしょうか。すなわち、モノを獲得したい、という欲望を、人間の他のすべての欲望に優先させ、その欲望を達成させるための行為を、人間の他のすべての行為よりも価値あるものとする“ものの見方・考え方”がおかしいのであり、このとどまるところのない「モノ欲しさ」、それゆえの「カネ欲しさ」の路線を突っ走ってきて、どうにもならなくなりかかっているのが現代の状況でしょう。この“へんな豊かさ”を形成している「モノ欲しさ」「カネ欲しさ」は、“飢え”のような生存を脅かす不安や恐怖を脱するための「モノ欲しさ」「カネ欲しさ」ではなく、白黒のテレビがあってもカラーテレビがないとひげ目を感じたり、自家用車を持っていないと生活水準が低いと思ったり、とりわけ日常の衣食住にことかくほどのこともないのに流行の衣服を買えなかったら、みじめに感じたり、家の構えを立派にしなければ、さげすまれると思ったり、というような、いわゆる“新し

い貧乏感”に根ざしている「モノ欲しさ」「カネ欲しさ」です。こういう“へんな豊かさ”“新しい貧しさ”をつくり出している状況が、なぜ、農村で、またとくに目立つのでしょうか。このような「モノ欲しさ」「カネ欲しさ」を断ち切って“へんな豊かさ”“新しい貧しさ”から脱するにはどうしたらよいかを考えるためにも、農村・農家の現代風な異常なまでの「モノ欲しさ」「カネ欲しさ」が、どこからくるかを考えてみなければなりません。

◇ ◇ ◇

戦後語られた第二次大戦中の小話の一つに、こんなのがありました。

多数のドイツ軍将兵の捕虜を收容している連合軍の施設内でのこと。捕虜たちが寄るとさわると語り合う話題は、明けても暮れてもいつも食べ物のことばかりでした。このことは、将校の捕虜専用の收容棟でも例外ではありませんでした。そこに收容されている捕虜は、いずれも知的水準が高いことでは折り紙つきであったドイツ軍の中にあっても、またとくに英才ぞろいの名将、知将の面々でした。

この棟で日夜かわされる雑談の話題も、やはり食べ物のことばかりでした。毎日收容所内を見回り、捕虜たち同士の会話にきき耳を立てている監視役のアメリカ軍将校が、ある日、この将校捕虜専用棟へやって来て言いました。「なんだ、誇り高きドイツ軍もずいぶん落ちたもんだ。教養あるインテリ中のインテリだったはずの諸君も、いまや、語り合う話題はまるっきり食べ物のことばかりじゃないか」捕虜のドイツ軍将校の一人が、とっさに言葉を返しました。「ではおたずねいたしますが、あなたがた優秀なアメリカ軍将校たちの中の雑談では、いつもどんなことが話題になるのですか」アメリカ軍将校は、得意そうに胸をはって言いました。「高い教養をつんでいる将校たるもの、いやしい食べ物の話なぞせぬ。われわれアメリカ軍将校たちは、仕事をはなれた雑談にふけるときといえども、いつも音

楽や美術や文学や、はては哲学、宗教など、つまり幅広い教養を身につけ、人格を高めるようなことを話題にするのだ」これをきいた捕虜のドイツ軍将校たちは、深く感じ入ったように、口をそろえて言いました。「なァーほどね、人間というものは、いつも、自分に最も欠乏していることに関心を抱き、それを話題にするものなんですなァ」

この小話、まことに興味深く、農村・農家の“へんな豊かさ”、“新しい貧しさ”を考える糸口を与えてくれます。

農村・農家の人たちが、異常なまでに「モノ欲しさ」「カネ欲しさ」の風潮に巻きこまれてしまったのは、それが自分たちに最も欠乏していた——そのために自分たちは、さげすまれ、みじめな思いをしてきた——それがあれば自分たちは、さげすまれない、みじめな思いをしないで済む——それがあれば世間から立派だと見てもらえる、と、思いこんでいたからではありませんか。しかし、農村・農家の人たちが、明治以降今日にいたるまでも封建時代と少しも変わらないような扱いを一般社会から受けつづけてきていることを思えば、そのような意識が根強く残っていたのは、むしろ当然のことだったと言えるでしょう。

おそれや不安は、何かに対する警戒心や、はずかしさがあるところに生ずる精神状態です。誰もが農耕を行なって、誰もが自給自足の生活をしていた時代を除けば、“農”にたずさわる人々は、いずれの時代の社会の中においても、常に支配され従属させられる立場に置かれつづけてきました。社会的分業化が進み社会や経済の構造も封建時代とはすっかり変わったように見える現代でも、農村・農家の人たちが抑圧され、さげすまれる扱いを受けていることは少しも変わっていないようです。それが証拠に、「都市と農村」という対比のされ方にもなると人々の口に出る「都会人と田舎っぺ」というような表現にも示される

ように、「農村」という呼び方には、そこを一段低く見下げたような別社会を指すひびきがこめられ、そこに住んで農耕を営む人々に対しては「農民」という特殊視される人種を指すような呼び名が、まだ平然と使われているではありませんか。このような歴史的背景や社会状況から、農村・農家の人々には、たとえ食をつめてでも他人に「バカにされないように」「さげすまれないように」という警戒心や、はずかしさに裏打ちされた「モノ欲しさ」「カネ欲しさ」の思いや、身の処し方がしみこんでしまっていたのでしょうか。

欲しいモノを手に入れようとするとき、なんらかの“力”が必要となりますが、力にもいろいろあるものです。最も単純な腕力をはじめ、知力、気力、権力、財力、と、それぞれ、表われ方や、表われる場面は違っていても、欲しいモノを手に入れようとするとき、それらのどれかが強く働き、あるいは、欲しいモノを手に入れようとする人が、それらのどれかを頼りにし、“武器”にしようとするものではありませんか。

“腕力”や社会的身分による“権力”が絶対に強くて、腕力が弱かったり、社会的身分が低いような人々には、満足にモノが手に入らないような時代や社会のしくみのもとで、長い間「モノ欲しい」気持を抑圧されつづけていた人たちが、腕力は弱くても、身分は低くても、カネさえあれば欲しいモノを手に入れることができる、という状況にひとたび置かれれば、それはもう、いままでの欲求不満を一挙にとり戻すかのように、夢にまで見たさまざまなモノを買いあさり、そのモノをかうためのカネを得ることに血眼になるのは当然なのかも知れません。なぜなら、そうすることによって、自分たちを長い間見下してきた周囲の眼に対する警戒心やはずかしさをやわらげ、おそれや不安を抱くこともなく、人並みに肩を張って暮らしていけると思いこんでいるのでしょから。

「所得第一主義」の現代社会の潮流の中で「モノ欲しさ」「カネ欲しさ」の風潮に巻きこまれている農村・農家の人たちの様相を描いてみれば、以上のように、これまで腕力(=武力)、さらに地位も権力も得られず、それゆえに欲しいモノを手に入れることができないでいたところ、カネの力によって何でも欲しいモノを手に入れることができるような時代になって、事実、カネによって欲しいモノを手に入れる手だてとその味を知り、所得向上が生活向上の唯一の道だとばかりにあくせくしている人たちの図ということになるでしょう。

ところが、どうも「所得向上=生活向上」という公式は成り立たないのではないかと、気づきはじめたところに、先述した保健婦さんが抱いたような疑問がわき“へんな豊かさ”“新しい貧しさ”が意識されるのです。ここで、その公式の内容と背景を考えてみましょう。

「所得向上=生活向上」という公式は、武力や地位によって生活向上をはかることなどとても望むこともできない大衆といわれる人たちが、「武力や地位は得ようと努力したって、しよせん一握りの者にしか得られないけれど、カネは努力次第でいつでも誰にでも得られる。そのカネを沢山手にすれば生活がよくなる」と信じているところに成り立っていたのです。しかし、どうやらこれは“迷信”だったのではないのでしょうか。確かに、武力や地位を得ることにくれば、一見、どんな人にも得られそうなのがカネです。ところが実際は、そのカネを得るにも、社会経済のしくみの変化につれて、さまざまなカラクリが生じてきて、そのカラクリが複雑になればなるほど、そのカラクリを知って、それをうまく操作できる力を持つ者とそうでない者との差が開いていきます。しかも、より多いことが強くいいことだという“量”の土俵の上でのことなので、得られるカネの多少が即、

力の強弱に置きかわります。“量”の多少による力関係となると、それ自身どんなに多くなっても、それより多いものが出てくれば負けますし、また、必ず「より多い」というものは出てくるものだというのが“量”の世界のおきてです。

カネを得る機会は決して均等なものでなく、つまるところ、カネの場合も、武力や地位の場合と同じくそれを多量に握り、その力を発揮して多くの人たちを抑えるのは、一握りの者たちということになるのです。一般の人たちの所得向上が、そのまま実質的な生活向上に結びつかないのは、このような一握りの力ある者が強大な力で、一般の人たちの向上した所得を吸い取っているからです。かって、武力や権力を持っている者が、その力によってより多くの力を集め、その集めた力を自分の都合のよいように利用したように、現代は、多量にカネのある者が、そのカネによって、より多くのカネを集め、その集めたカネをもってさらに多くのカネを集めたり、あるいはそのほか自分の都合のよいように利用し、役立てているのです。より多く、より多く、と集めようとすれば、集めるパイプを太くする必要があります。一般の人たちの“みかけの所得”が向上しているのは、このパイプが太くなっているというだけのことで、「所得向上」のかけ声にのり、一般の人たちのふところへ以前より多量に入ってきたカネは、また右から左へ以前より多量に出ていっているのです。いわば素通りしているのですから、実質的には何も残らないし、所得を手にしたはずの人の何の役にも立たないのは当然です。その太くなったパイプの材料になっているのが、カラーテレビであり、自家用車であり、家電器具類であり、その他さまざまな都市消費文化の産物です。

こう考えてくると、一般の人たちの「所得向上」というのは、実はそれを吸い上げて富の蓄積をはかろうとする者にとってこそ好都合で、その者の生活向上にはつながるので

しょうが、素通りするパイプを保持する役目のような人たちにとっては、保持しているパイプがどんなに立派になっても、そのことがその人たち自身の生活にはプラスどころか、へたをすると、保持するパイプが立派になり過ぎれば、そのパイプを保持することだけで精一ぱいで、実質的な生活内容は、マイナスにすらなりかねないということがはっきりわかります。

「所得向上」に幻惑され、その実“パイプ保持係”に過ぎないような立場に農村・農家の人たちが追いこまれたのは、もともとその社会経済のしくみから、農村はカネに縁がなかったからではないでしょうか。自分たちのことは自分たちで始末するという“ならわし”“しきたり”“おきて”、それらを支える互いの信頼感や連帯感で暮らしを営んできた人たちにはカネは不要でした。このカネが不要な暮らし方を、カネが必要な暮らし方に変えてきたのが、そしてまた、カネが不要な仕事のやり方を、カネが必要な仕事のやり方に変えてきたのが、いわゆる「農村・農業の近代化」路線ではなかったでしょうか。“ならわし”“しきたり”“おきて”を捨て去り、信頼感や連帯感より、カネの方が頼り甲斐がある、という“信仰”を植えつけられ、すべての事柄をカネに換算して処理するという社会経済のしくみの中へ組みこまれて、すっかり昔と姿を変えてきたかに見えるのが「所得第一主義」に巻きこまれ、浮き足立っている現代の農村ではありませんか。

こうして“豊かさ”を追っている限り、量の論理にのせられて、「もっともっと」と努力する、そういう努力をすればするほど、逆に“貧しさ”の泥沼にはまりこんでいく、というのが、「モノ欲しさ」「カネ欲しさ」路線の迷路です。

では、「昔より所得が向上したのに、昔より持ち物が豊富になったのに、昔より生活しに

くくなっていく」というこの“へんな豊かさ” “新しい貧しさ”から脱するにはどうしたらよいか。答えは一つです。“量の土俵”に限りダメなのです。“量の土俵”で所得向上にどんなに血眼になってもダメだとすれば、土俵を変えるしかありません。つまり、ものの方・考え方を換え、ものごとを判断するモノサシを換え「何を大事にするのか」「生きていくために何を大切にしなければならないのか」「必死になって追い求めなければならないものは何なのか」「何を欲しがることが暮らしの豊かさにつながるのか」という、その“何”を換えなければならないのです。その“何”がいまはカネです。所得です。それを一体「何」に変えたらよいのでしょうか。

◇ ◇ ◇

「カネなんて問題じゃない。思うことを存分にやれるような生活がしたい」と願う若者や、「所得はまあ人並み以上かも知れないが、まるで自分の時間がなくて、こんな生活でいいのかと悩んじゃう」と嘆く事業家の話を、近ごろよく耳にします。その心は例外なく、「やりたいと思うことを自由にやれる時間が欲しい」なのではありませんか。そこには、「持っていないものを欲しがると」というまぎれもない“貧しさ”が感じられます。その人たちにとっては“所得”はもはや豊かさの指標ではなくなっているのです。そして“所得”に替わって“時間”が登場しようとしていることがうかがえます。すなわち、自分で自由に使える時間を沢山持っている人ほど豊かである、ということになる時代が来つつあるのではありませんか。言うまでもなく、その“時間”は「もてあましてどうでもよい時間」なんぞではなく、「用途に応じて自分の意のままに自由に使える時間」です。そのような“時間”をどのくらい持っているかが、“豊かさ”の指標になっていくのではないかと思えるのです。

人間は生きていくのに、限られた時間をい

ろいろに使います。睡眠、食事、仕事、休息、旅行、遊び、交際、趣味、等々、それらに費やされる時間を、「しなければならない」ということで費やす時間と、「したい」ということで費やす時間とに分けてみますと、ここで求めたいと思っている「自由自在に使える時間」というのは、もちろんその「したい」ということで費やされる時間です。一見、同じことをしているような仕事でも遊びでも、それを心底から「したい」と思っているのと「しなければならない」と思っているのでは、その人の生活や人生にとっての意味は全く違って来るはずで

す。ここまで考えてきますと、“所得”に替わるべき“何”がはっきりしてきたようです。すなわち「ゆったりとした気分で、自由自在に使いこなせる時間」をより多く持とうと努力することが、“へんな豊かさ”“新しい貧しさ”を脱する道である、ということです。農業をやるにしても、ほかのやりたいことを一切封じられてそれしか生きる道がなく、しかたなくそれをやらなければならない、そうしてカネ、カネ、カネと追い求め、追いまくられるというのであれば、それこそみじめです。しかし、ほかにやれることもいろいろあるけれど、自分は農業が好きで、多くの仕事の中からそれを選んでやっている、というのであれば、そのこと自体がすでに、やりたいことに時間を費やしていることすし、そういう精神構造がやがて新しい豊かさの指標となる「自分の意のままに自由自在に使える時間」をより多く生み出していくことになるでしょう。

貨幣経済の社会で暮らす限り、カネを不要とするわけにいかないことはもちろんですが、先述しましたように、「モノ欲しい」「カネ欲しい」という欲望を、他のすべての欲望に優先させ、その欲望を満たす行為を他のすべての行為よりも価値あるものとする“ものの見方・考え方、判断のしかた”が問題なのです。「モノ欲しい」という場面では一歩立ちどま

り「それは私にとって本当に必要なモノか」と自問してみたり、あるいはまた「カネ欲しい」と思ったとき「何のためにいまカネが欲しいのか」をもう一度考え直してみることが、自分の暮らし方を変え、“へんな豊かさ”“新しい貧しさ”を脱して本気に豊かな暮らしへの道を開くために、いますぐにでもできることで、必要なことなのです。そのように自問し、考え直すために一歩立ちどまるだけの暮らしのゆとりが、いまの農村・農家にはあるはずです。

ご記憶の方もいらっしゃるかと思いますが、4、5年ほど前、或新聞の家庭欄で識者の関心を集めた一少女の投書がありました。その少女をめぐる話をもって、今日の講演を終わりたいと思います。

少女は、いわゆる“農村カギツ子”でした。学校から帰っても、家に居るべきお母さんの姿を見ることがありません。お母さんは毎朝マイクロバスに乗って賃かせぎの仕事に行っています。少女は、そんなお母さんを見て、生活していくにはおカネが必要だからしかたないと思うけれど、やはりお母さんにはいつも家にいて欲しかったのです。或る日、少女は

破れた靴下を母親に渡して言いました。「お母さん、これついでよ」母親は笑顔で受け取ったものの、次の日も、次の日も、また次の日も、いつまでたっても、その靴下を繕うとはしませんでした。そうして幾日かたった或る日、それは給料日でした。母親はいつもより元気よく帰宅すると、チョッピリ誇らしげな顔で「ハイッ」と言って少女に小さな包みを渡しました。開いてみると、それは新しい靴下でした。ところが、娘の喜ぶ顔を予想した母親が見たのは、逆に、娘の泣き顔でした。少女は泣きながら大声で言ったのです。

「お母さん、私はあの破れた靴下をついでよって言ったじゃないの、新しい靴下を買ってよなんて、一度も言わなかったじゃないの。破れた靴下をつがないで、こんな新しい靴下を買うおカネをかせぐために働きに行くのなら、新しい靴下なんかいらないから、もう働きに行かないで、家にいてよ」

農村・農家の“豊かさ”“貧しさ”の問題についてはもとより、私たち誰にとっても、現代の暮らし方について、多くのことをあらためて考えさせられる話ではないでしょうか。

以上

略 歴

- | | |
|-------|---|
| 昭和30年 | 東京大学農学部卒業
同大学院を経て昭和34年東京大学助手
(農場勤務) |
| 昭和35年 | 大分県農業試験場技師 |
| 昭和38年 | 富山県立技術短期大学助教授 |
| 昭和47年 | 同上教授 |